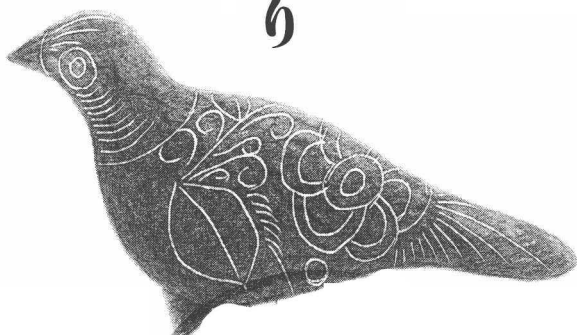


本日も
ビンボーなり
松下竜二



本日もビンボーなり



松下竜一

筑摩書房

松下竜一（まつした・りゅういち）

一九三七年大分県中津市に生まれる。豆腐屋自営をへて、作家となる。一方で、豊前火力発電所建設反対運動を契機に市民運動をはじめ、リーダーとなる。この運動の機関誌「草の根通信」は一九七三年に創刊され、現在も刊行されている。本書は、この「草の根通信」一九九五年七月号から一九九七年十月号に掲載されたものなどに加筆した作品である。小社刊『底ぬけビンボー暮らし』の続篇にあたる。

本日もビンボーなり

一九九八年五月二十日 第一刷発行

著者 松下竜一

発行者 柏原成光

印刷 中央精版印刷
製本

発行所 筑摩書房

〒二一八七五 東京都台東区蔵前二五三
振替〇〇一六〇一八四二三

ご注文・お問い合わせ、乱丁・落丁本の交換は左記宛へ。
〒三三八五七 大宮市柳引町二六四 筑摩書房サービスセンター
TEL 〇四六五二〇〇三

目次

前口上	7
一 今日の夕日は何点？	8
二 姉弟の旅	14
三 精霊舟を流す	22
四 売れない作家の散歩三昧	28
五 カモメ、帰る	35
六 電報ごっこ	41
七 あの青春書簡が……	49
八 名誉会長だって!?	56
九 点滴室にて	63
十 突然の電話で	72
十一 頬杖ついて、茫然と	80

十二	“母の日”はアカシヤ忌	87
十三	人形を抱いて……	99
十四	明るいビンボー!?	103
十五	息子の結婚	110
十六	ささやかな増刷なれど	116
十七	鉄橋の上と下で	121
十八	本をめぐるあれこれのこと	129
十九	突然の訪問者	135
二十	ラジオ談話室	142
二十一	ああ、領収書	150
二十二	娘との日々	156
二十三	センチメンタル・ジャーニー	163

二十四 あ の “ いや な 奴 ” が や っ て き た 172

二十五 入 院 の 日 々 182

二十六 身 柄 引 受 人 失 格 199

二十七 隠 っ て い ま し た 、 実 は …… 207

本日もビンボーなり

装画 高瀬省三
装幀 南伸坊

前口上

本書は、一九九六年九月末に刊行された『底ぬけビンボー暮らし』の続篇ということになる。すなわち、大分県中津市在住の売れない作家松下センセの一九九五年七月から九七年十月に至る二年四カ月の生活報告記である。

前著を読んだ読者から、『底ぬけビンボー暮らし』が大いに売れて松下センセもついに積年のビンボーの境涯から脱するのではないかという御心配も寄せられたが、それこそ杞憂きゆうというものであった。読者は、本書で相も変わらぬ松下センセの暮らしを見るだろう。

思えば松下センセがかくの如き生活記を綴り始めてから二十余年が過ぎたが、激変していく時代の流れの中で、変わらぬがゆえに取り残されてゆく一方の松下センセの暮らしぶりは、いまや読者の郷愁の如きものを誘っているのかも知れない。

一 今日の夕日は何点？

昼間に松下センセ宅を訪ねて下さって返事がないときには、隣の空地にまわってフェンス越しに犬たちの名を呼んでみて下さい。

ラン、インディ、チェリー、ケヴィン、コナン……どの名を呼んでいただけでも結構、どれかが顔を見せたなら松下センセ夫妻はどこか遠くへ外出しているのだと思っていたきたい。

もし一匹の犬も顔を出さなければ、五匹の犬を連れて散歩に出ているわけで、山国川の川辺を上流へと辿っていたければ必ず出会えるはずです。

だいたいは県境に架かる山国橋の下にシートを敷いて坐っていることが多いのですが、最近ではもつと上流へとさかのぼって日豊線の鉄橋の真下の岩に坐っていることもありますので、そこまで御足労いただければと思います。松下センセ宅から鉄橋までは、ゆっくり歩いて三十分位の距離になります。

昼間から犬の散歩だなんてといわれそうだが、これはもうやむをえない理由によっている。他の犬の散歩ラッシュとかちあう時刻を避けねばならないのだ。

川辺では五匹の犬たちを解き放って自由に駆けまわらせているのだが、他の犬が姿を現すととたんに大騒動が現出する。どれか一匹が気づいて吠え立てながら突進して行くと、つられて他の四匹もいっせいに疾駆して行くので、五匹に取り囲まれる犬はしっぱを巻き込んでおびえてしまう。相手の犬や飼い主を傷つけでもしたらえらいことになる。慌てて細君が追っかけて行き（松下センセは急な動作はまっ

たできないので、相手に詫びをいいながら五匹を呼び戻そうとする。好物のドッグフードで釣ってどうか五匹を連れ戻すまでは騒動が続いてしまう。

それを避けるために、他の犬たちが一番散歩をしないであろう時間帯を選ぶとなると、どうしても真昼間となってしまうのだ。

朝から五匹が騒いでやまないときには午前十時頃から出ることもあるが、ふだんは昼食をすませたあと二時前頃から家を出ることが多い。六月も下旬の午後ともなるともう真夏の日照りで、松下センセは帽子をかぶり細君は日傘を差している。

インディだけはつながずに残りの四匹を二人で二匹ずつつないでいくのだが、逸りたつ二匹の力に曳きずられて松下センセはいつも肩で激しく息をしている。さいわい河口に着くまでの距離が短いのが救いで、土手から川辺の道に降りる坂の途中で四匹を解き放つ。

それこそ矢のように五匹はいっせいに川原へと走り降りて、水辺へ突進する。なかでもインディは水の中に坐り込んで首だけ出している。

河口に潮が残っているときはいいが、干潮の干潟を駆けまわったときには全身をどぶ泥で染めてしまつて、そんな身体ですりついてきたり飛びついてきたりするので（そうされるのは細君の方が多い）、細君はキャッキョッと笑いながら悲鳴をあげている。もちろん、汚れても構わないような散歩用の服装で来てはいるのだが。

山国橋の下に坐る細君を囲んだ五匹の犬たちの写真がある。読者である岡山のTさんの依頼によつて撮つた一枚である。Tさんはわざわざ訪ねて下さり昼間の散歩につきあったのだが、あとで「五匹の犬の写真を貰えませんか。担任している養護クラスの教室に貼つたら、子供たちがきつと喜ぶと思います」という連絡をいただいて、松下センセがフィルム一本を使つて撮影した。が、これが大変だった。五匹が揃つて顔を向けてくれるチャンスなんてありはしない。まったくでんばらばらで、号令一下

いっせいに集合というようなしつけはなされていない。カメラを向けるとコナンは必ずしっぽを振ってレンズに寄って来てしまつて撮影にならない。不満の残る写真ばかりになったが十点程を選んで大判にして送ったら、Ｔさんから「子供たちがとても興味をもつて喜んでくれています」という電話をいただいた。

犬たちの写真を撮つたとき、いっしょに草むらのヒナギキョウにもカメラを向けたのだが、このあえかな花の風情は松下センセの写真技術では再現できなかった。草むらに遠慮がちにそつと咲いている薄青色のヒナギキョウが風に揺れているさまほど可憐な光景はないだろう。草むらを行くときに、犬たちにもヒナギキョウを踏ませないように気を配っているのだ。

松下センセと細君の昼間の散歩は二時間に及ぶこともあるが、それで一日の散歩が終わつたわけではない。昼間の散歩はあくまでも「五匹の犬たち」の散歩で、あとでもう一度自分たちだけの散歩がひかえているのだ。

好天の一日が夕刻を迎え六時を過ぎた頃から松下センセはそわそわして、下駄をつっかけ辻まで出て行く。辻に立つて河口の方に顔を向けると、ちょうど北門通りの果ての空に夕日が傾いて見える。五月の頃よりもやや通りからそれてきてはいるが、まだ紅く染まる前の夕日が白く輝いて傾いている。空の下の方がやや霞のかかった色合いを帯びていて、澄んだ空よりもこんなときの方が夕日は紅々と染まるようである。

「おい、今日の夕日は満点になりそうだなぞ」

戻ってくると、台所で炊事をしている細君の背後から告げる。

「満点の夕日なんて久しぶりやなあ」

細君が包丁の音を絶やさずに言葉を返す。二人で夕日を見るたびに十点満点で採点をしているのだが、

細君のいうとおりなかなか十点の夕日にはお目にかかれない。この時期雨天や曇天が多いし、たとえ晴れてはいても真紅に燃え上らないままに沈んでいったり、紅さに輝きが足りなかったり、途中で雲に隠されたりして、ああこれこそがまことの落暉だと感嘆するような日はめったにないものだ。

「どうするの？ 夕飯はあとにする？」

「そうだなあ、まだ食べられんのだろ？ だったら夕飯はあとにしないと間に合わんな」

夕日が豊前の山並みの向こうに消えるのが七時半近い時刻になるので、七時前から河口に行って待機せねばならない。それまでに夕食をすませるのではちょっと慌しい。

「じゃあ、夕食の用意をすませておいてから行くわ。ちょっと待ってね」

細君にいわれて松下センセは台所を離れて待っているが、やがて隣家の酒屋のトタン壁が夕映えで輝き始めるともう落着かなくなる。

「おい、もうそこまでにしておいて行こうよ。あとは帰ってからにして……」
またしても細君を背後からせかせてしまう。

「はい、はい」

細君は笑ってエプロンをはずすと、二階の杏子を呼ぶ。

「ちょっと、おとうさんと夕日を見に行ってくるから、待っててね」

「エーッ、またなの」

杏子は悲鳴のような声をあげた。

「毎日毎日、夕日を見に行って何がそんなにうれしいの？ 見たいんならおとうさん一人で見せておけばいいんだよ。おかあさんまでつきあう必要はないやろ。——杏子こそいい迷惑やないの」

五十八歳の父は十七歳の娘にこんなふうに冷たくあしらわれているのだが、別に松下センセはそのことを寂しがっているわけではない。こういう父親軽視も、やがて大人へと脱皮していく前の通過儀礼な

のだと見ている。

「おとうさん、散歩ばかりしてないで、少しは仕事をしたらどうなの？」

「杏子の見えないところで、頭脳労働をしてるんだ」といつてはみるが、松下センセの声が少しうしろめたい。

松下センセと細君は犬たちに気づかれぬように道の反対の側に寄ってそつと出て行こうとするのだが、すでに気配を感じ取っている五匹の犬たちがフェンスの扉にひしめいて激しく吠え立て、哀れな鳴声をあげる。そのすさまじい声は周辺一帯に響きわたって、近くのスーパーに買物に来ている客たちがびっくりにして視線を向ける。だがどんなに哀訴され泣訴されても、犬の散歩ラッシュである時刻に五匹の犬を連れ出すことはできない。非力の二人なので、とうてい押さえ切れないのだ。

五匹の犬の哀訴の声を振り切つて急いで北門通りへと曲がつた瞬間、いまや真紅に燃え始めている夕日にいきなり顔を染められて、細君がワーンと声をあげてまぶしそうに手をかざした。

中津神社の裏手の城の石垣の上に来て石の台座に腰を降ろすと、高台のここは夕日を望む絶好の位置になる。眼下に中津川（山国川の分流）が流れて、満潮に近い流れに夕日の反射が紅々と带状にさざめきながら川を横断している。日が沈んでしまふまでに三十分位はあるだろう。

脇目もふらずにさっさと歩いていく人が何人もいる。運動のために歩いているのだが、こんなにも美しい夕日をちよつと立ちどまつて見てごらんよといったくなる。

梶井基次郎の「城のある町にて」では、城跡の高台から遠い空にあがる花火に気づいた（音もかすかなのだ）主人公が、近くにいる少年たちにも気づかせようとして熱心に花火の方角に顔を向けつつける光景があったが、松下センセもそんな思いで夕日に熱心に顔を向けているのだが、下の道を行く人は顔を上げてくれない。

いまとなつて白状すれば、若き日の松下センセは梶井基次郎のような珠玉の短篇小説を一篇だけ残し

て二十代で世を去ることを、どんなに願ったことか。

「輝きが少し落ちてきたと思わん？」

細君がいいだしたとき、松下センセもそう感じ始めていた。空の下方の薄墨色の靄のような雲が夕日にかかり始めているのだ。

「うーん、これでは減点だなあ……」

今日こそ十点満点の夕日だと思っていたが、真紅の輝きが落ちてきている。夕日は下がってくるほど沈み方が速く感じられる。みるみる夕日は輝きを喪い、紅い貼絵のような真円となってしまう。

「これじゃあ……七点だな」

「でも形がはっきりしてるから、八点くらいはあると思うわ」

夕日の立場からすれば、勝手な点はつけないでくれといいたところだろう。

ついに夕日が豊前の山並みに沈んでしまっても、二人はしばらく腰を上げない。やがて暗く沈んでいく川が、たそがれの中で最後に白い流れとなって浮かびあがるひとときがあつて、城垣の上から真下の川に心を吸われている。

「そろそろ帰らんと、杏子ちゃんと五匹が待つてるわ」

細君が先に腰をあげる。五匹の犬たちは一日に一度だけの食事だが、それが夕食なので待ちかねてそわわしているにちがいない。松下センセも立上ってウーんと腰を伸ばす。

(一九九五・七)

二 姉弟の旅

七月九日（日曜日）に、早くも父の三回忌の法事をすませた。

いずれも高齢となつてゐる親戚には声をかけずに、父の子供たちとその家族だけでの内輪の法事としたが、それでも総勢十五人が集まつた。

松下センセの姉弟は、幼稚園を退職した六十歳の姉を頭に、以下二歳ずつ若くなつていく五人の弟がいるのだが、残念ながら一人だけ帰れぬ弟がいて、揃つたのは五人である。

中津市内に住む姉夫婦、松下センセ夫婦と健一と杏子、埼玉県上尾市の雄二郎夫婦、市内の紀代一夫婦とその長男、カナダから帰国した末弟満夫婦とその末娘。もうひとりおまけがいて、彼女と同行したボーイフレンドという十五人である。

カナダに家族ぐるみで六年間赴任してゐた末弟が任期を終えて帰国したのが今年の五月で、これで五人の姉弟が勢揃いしたので一段と賑やかになつたが、なんと末弟の末娘が連れて来たボーイフレンドというのがカナダの若者だつた。末娘は両親が帰国したあとも一人だけカナダに残つて高校生活をつづけていて、そのボーイフレンドも同級生だというから十七歳だが図抜けて大きな身体をしている。そのクレッジ君も神妙にお経を聞いているので、青い眼の外国人に手を合わされた仏壇のじいちゃんとはさぞかしめにくらつたことだろう。国際化の波はこんなところまで及んでいる。

三回忌の法事は午前で終わり、午後早く一行十二人（義兄と健一と杏子は行けなくて）は小型バスを